

B. ラッセルのナショナリズム論

— その論理構造と課題について —

金子光男

The Logical Construction and Problems Arising from Bertrand Russell's "The Theory of Nationalism"

by Mitsuo Kaneko

Nationalism, in theory, is the doctrine that men, by their sympathies and traditions, form natural groups called nations.

Though nationalism is a simple and natural feeling in itself, it is apt to extend to a very complex one, with primitive instincts and highly intellectual convictions, when political power becomes a part of it.

Russell found that modern nationalism has political and economic character, and the essence of it is the sense of rivalry between one's own nations and others. This conclusion was arrived at through his analysis of the logical construction of nationalism by considering its historical evolution.

He attached great importance to the religious elements of nationalism, which consist of desires for excitement, triumph, honor and power; and when he examines nationalism from such a viewpoint, it becomes patriotism like a religion.

The reason why patriotism in nationalism comes into question, is because it gives an effective influence to culture and education.

Therefore he intends to reject not only narrow-thinking nationalism but also the teaching of false history.

How are we able to do away with the evils of nationalism? The only cure for these evils is the diminution of nationalism — the transition to internationalism. Thus, to win the peace of mankind, he extends the theory of world government.

(1)

現代の思想状況のなかできわめて重要な問題を提起しているのは、ナショナリズム(Nationalism)をめぐる問題である。そしてとくにアジア諸情勢の緊張を反映したベトナムにみられるナショナリズムの高揚は、この状況に迫車をかけたということができよう。日本においても、昨年あたりから伝統的なナショナリズムの立場にたって、歴史や文学の領域で注目すべき発言がみられた。たとえば、「明治ナショナリズムか戦後民主主義か」といった論戦や、「大東亜戦争肯定論」をめぐる批判と反批判や、さらに近代主義的ナショナリズムの否定的媒介としての「日本の土着思想」の主張などのごときである。

こういった状況のなかで、教育界にあっても、『教育基本法』の日本的定着という意味をもつものとして、『期待される人間像』が作成され、今後の教育の主導権をとろうとしている。かくのごとく、ナショナリズムの問題が、思想的気流のなかでクローズアップされてきたのである。もとよ

り、ナショナリズムは、民主主義の立場や、マルクス主義の立場や、また近代主義その他の立場などによって、その捉え方が異なるのであるが、従来比較的にその論理構造を分析したものは少ないように思われる。われわれは、この問題を、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell) によって究明したいと思う。というのは、彼のナショナリズムの分析は、日本を含めて世界の危機的状況を克服する重要な示唆を示していると思うからである。

さて、まずナショナリズムは、「民族主義」「国家主義」ないし「国民主義」などと種々に訳されているのであるが、それはナショナリズムがきわめて複雑な多義性をもち、ただ、政治的観点や歴史的視点だけからでは規定できなく、総合的な領域から捉えなければならぬものであるということである。かつてナショナリズムの意味を論じた L. L. スナイダー (Louis L. Snyder) によれば、「ナショナリズムとは、敵意にみちた世界におかれた集団が、その安全を確保するために示す防衛機構である」⁽⁴⁾ ということである。ここにすでにナショナリズムのもつ問題性が示されているのであるが、ここで近代主義の立場でナショナリズムを捉えた丸山真男の典型的な定義を考え直してみよう。

彼は、ナショナリズムを「あるネーション (nation) の統一、独立、発展を志向し押し進めるイデオロギーおよび運動である」といい、この概念が「歴史的状況に応じて、あるいは憧憬ないし鼓舞の感情を、あるいは憎悪ないし嫌悪の感情をよび起すのである」⁽²⁾ といっている。ここでは同じ概念が、一方では自由と独立を、他方では抑圧と侵略を意味するのである。したがって、ナショナリズムは、上からの(反動的性格の)それを「国家主義」とし、下からの(進歩的性格の)それを「民族主義」ないし「国民主義」と一応区別できるが、しかも両者は、歴史的限定において無数の接点をもって発動するものであるということが出来る⁽³⁾。

さて、では、ラッセルは、ナショナリズムをどのように把握したのであろうか。彼はすでに1910年代にこの問題に多大の関心をもって数多くの論文を発表している。まず彼の社会思想と人間性の分析において顕著であるといわれる『社会改造の原理』(Principles of Social Reconstruction, 1916)のなかで、彼は「ナショナリズムとは、人間がかれらの共感と伝統 (sympathy and tradition) によって、一つの中央政府のもとに統合されるべきであるとする国民 (nations) と呼ばれる自然的集団を構成する原理である」⁽⁴⁾ といっている。ここにすでに、ラッセルは、ナショナリズムの構成要素として、後述する「国民的性格」(national character) を指摘しているのである。

ついで、ラッセルは、『産業文明の将来』(The Prospects of Industrial Civilization, 1923)のなかで、「ナショナリズムは、現代世界を鑄造する強大な力をもったものである」⁽⁵⁾ といいい、この力は、一つは権力の保持者にとっての力 (one for the holders of power) であり、他の一つはかれら自身を解放しようとしたたかう人びとにとっての力 (the others for those who are struggling to emancipate themselves) であるといっている。ここにわれわれは、ラッセルが、丸山真男の意見よりずっと以前に、ナショナリズムが、一方では侵略と抑圧を、他方では自由と独立をというように対極のいみを持つものであると論じていたのを認めることができる。

このように、ラッセルのナショナリズムの概念規定を確認したうえで、彼の全体的展望を考えてみよう。彼はすでに今から40数年前に、現代世界における強大な力を持つものとして、①「インダストリアリズム」(Industrialism) と②「ナショナリズム」(Nationalism) との2つをあげている。そして前者を「資本主義」(Capitalism) と「社会主義」(Socialism) との形態に分け、後者を「帝国主義」(Imperialism) と「抑圧民族の自由獲得の闘争」(the attempt to secure freedom for oppressed nations) との形態に分けている⁽⁶⁾。これを表示すれば次のごとくである。

Political Forces	{	① Industrialism	{	Capitalism
				Socialism
		② Nationalism	{	Imperialism
				Self-Determination

本稿で論じようとするのは、②であり、この表でもわかるように、ラッセルは、ナショナリズムはそれが権力の保持者に握られると「帝国主義」に転化し、仰圧された国民の自由のためのたたかいは「民族自決主義」(Self-Determination) となることを示しているのである。

(2)

ではナショナリズムは、イデオロギーとしていかなる構造契機をもつものであろうか。もとよりナショナリズムの構造内容は、歴史的段階や民族によって種々の様相を呈するものである。そのことはナショナリズムを、H. コーン (H. Kohn) が、西欧型と非西欧型に分けたり⁽⁷⁾、E. H. カー (E. H. Carr) が第1期から第4期に分けたり⁽⁸⁾したことによっても明らかである。だが、われわれは、ここでは、ナショナリズムの基本的エトスを表現した「国民的性格」(national character) がどのような構成要素をもっているかということに重点をおいて考えてみよう。

この点について、重要な見解を表明したのは F. ヘルツ (F. Hertz) である。彼は『歴史と政治におけるナショナリティ』(Nationality in History and Politics, 1944) において、国民的性格の構成要素として、①「国民的伝統」(national tradition) ②「国民的利益」(national interest) および③「国民的使命」(national mission) の3つをあげている⁽⁹⁾。①は、国民の言語、風俗などの民族的な文化遺産を維持し、自国の威信や栄光を誇りと感ずるものであり、伝統的な行動様式を尊重し、そのためときには国粹主義的なものに傾斜しやすくなるものである。②は、国民にとって有益であると思われるものに関係をもち、対内的には地域的利害の克服、対外的には領土や権益の拡大の要請としてあらわれるものである。そして③は、国民にその国家がいかに存在の価値があるかという理由と目標を示して、国民を精神的に鼓舞し激励するものである。かくて、国民的性格は、これらの構成契機を総合したものであって、近代国家はたくみにこれら进行操作し、国民的感情や意志を伝統に定着させ、使命を認識させながら、自己の望む方向へみちびいていったのである。

さて、ラッセルは、近代国家がナショナリズムの構成要素たる「国民的性格」を伝統に定着させ使命を認識させて、政治権力のおもむくままに操作していった歴史的系譜を分析しながら、そのナショナリズム論を展開するのである。そもそも西欧においては、民族的意識は中世末期から徐々に成熟したのであるが、イデオロギーとしてのナショナリズムが形成され発展していくのは19世紀以後であった。そしてナポレオンの侵略が諸国の旧体制を破壊すると同時に、他方に諸民族の抵抗運動をひき起していったのである。この点についても、ラッセルが、ナショナリズムはどこでも外国の支配か脅威に対する抵抗から始まった⁽¹⁰⁾として、これを歴史的事情に関連しながら分析したのは正しかったといえよう。ナショナリズムは、このように一方ではネーションを基盤とする近代独立国家を形成しながら、他方では特権階級の独占から解放してこれを国民的基盤に拡大しようとして、これらが結合して発展していったのである⁽¹¹⁾。

しかしながら、自由民主主義的な要素と国家主義的な要素をあわせもっていたナショナリズムはビスマルクの新時代となり、ドイツ統一という事態に直面して、民主主義的なものよりも国家主義的なものへと転化してゆき、今日にいたるまでこの新しいナショナリズムが西欧を支配したのである。ここに西欧資本主義諸国のナショナリズム運動の悲劇があり、やがてその運動は第1次世界

大戦を招来するにいたったのである。ラッセルは、ナショナリズムの構造契機としての国民的性格が、自由主義的契機と国家主義的契機という両面性をもっていることについて、次のような独自の見解をとっている。

すなわち、ラッセルは、近著『事実と虚構』(Fact and Fiction, 1961)の第5章「ナショナリズムの功罪」(Pros and Cons of Nationalism)において、「ナショナリズムには種々の面がある。第1の大きな裂け目は、文化的な面と経済、政治にかかわる面とのあいだに存在する。文化的観点からすれば、ナショナリズムを善しとする非常に強い根拠があり、政治的、経済的観点からすれば、それは通常有害なものと考えられている」⁽¹²⁾と述べている。このことから理解されることは、まず、ラッセルが、ナショナリズムを「文化的ナショナリズム」(cultural nationalism)と「政治的・経済的ナショナリズム」(political and economic nationalism)とに分けているということである。彼は、文化的見地からすれば、ナショナリズムは大きな価値をもっているという。じじつ古代ギリシャと文芸復興のイタリアは、ともに文化的におどろくべき寄与をした。しかしその文化的寄与が崩壊のやむなきに至ったのは政治的統一性を欠いたためであって、そのために、彼は文化を發展させるには、文化的独立性と政治的統一性とを結合しなければならないと主張するのである⁽¹³⁾。

それは、文化的ナショナリズムが、過去の歴史において往々にして計画的に政治的ナショナリズムを高揚するための媒介とされてきたという事実を、いやというほど見せつけられてきたからである。そしてここに政治権力の魔術が存在するのである。ラッセルは、この政治権力を媒介としたナショナリズムを、素朴な自然発生的ないみでのナショナリズムに対して、「近代ナショナリズム」と称するのである。では、この近代ナショナリズムの構造を分析してみよう。

(3)

ラッセルのいう「近代ナショナリズム」(modern nationalism)は、政治権力を媒介としたものであり、なんらかの形で国家の意志がはたらき、たんなる素朴な自然発生的な感情ではなくて、「原始的諸本能」(primitive instincts)と「高度に知的な諸確信」(highly intellectual convictions)とから築きあげられる「きわめて複雑な感情」(a very complex feeling)から形成されるものである⁽¹⁴⁾。ここには、故郷や家庭や友人といったものへの愛着があり、それがわれわれに、自分たちの国を侵略から守ろうとする特別な関心をいだかせ、また外国人と対比して同胞を好むという穏和本能をもいだかせる。またそこには、わが国民は偉大なる伝統を代表し、人類の重要な諸理想を代表している信念も存在している。

ところで、ラッセルの「近代ナショナリズム」の概念を、従来からしばしば使われてきた概念と区別しておかなければならない。そのために、ナショナリズムをその歴史的系譜にしたがって類型化したC. J. H. ヘイズ(C. J. H. Hayes)の概念を取り上げてみよう。彼は『近代ナショナリズムの歴史的進化』(The Historical Evolution of Modern Nationalism, 1931)のなかで、「近代ナショナリズム」(modern nationalism)は、18世紀の啓蒙時代に人道主義的な性格をもって成立したとみなし、その構成要素は、貴族的・保守的な性格をもった「伝統主義的要素」(traditional element)と、その対極の位置にある民主的・進歩的な性格をもった「自由主義的要素」(liberal element)とをあわせもつものであることを主張した⁽¹⁵⁾。

しかしながら、ラッセルのいう「近代ナショナリズム」はそのような類型化によるものではなくて、むしろE. レンベルク(E. Lemberg)のいう「イデオロギー的なナショナリズム」(der ideologische Nationalismus)⁽¹⁶⁾に相当するものである。すなわち、ラッセルの「近代ナショナリ

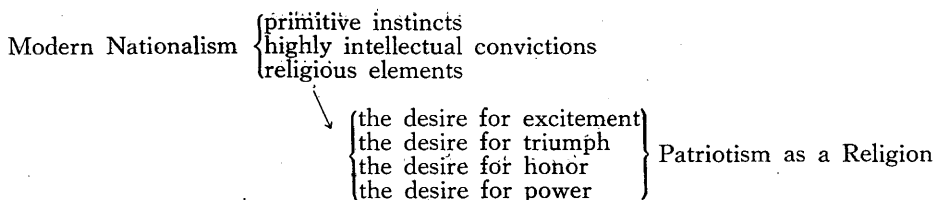
ムは、彼がすでに分類した「政治的・経済的ナショナリズム」(political and economic nationalism)なのである。しかも、それは人間性に基礎をおき、知的に、イデオロギー的に、かつ政治的に加工されたナショナリズムなのである。そのことは、ラッセルが「ナショナリズムの本質は、自国民と他国民とのあいだの敵対競争の意識 (the sense of rivalry between one's own nation and others) である」⁽¹⁷⁾ ということから理解されることである。かくて、ナショナリズムは、彼によれば、自国民に対しては、忠誠と友好の感情を、敵対国民に対しては、憎悪と闘争の感情をもたらすこととなるのである。

したがって、ナショナリズムにおどらされた人は、自国はもっとも文明化され道徳的な国であるが、その敵はあらゆる暴虐と卑屈の罪を負っており、そのため自国民はどのような残虐なことを行なっても、それは決して不当ではないと信ずるにいたるのである。それゆえにこそ、ラッセルは、「ナショナリズムは、疑いもなく現代のもっとも恐ろしい害悪である」⁽¹⁸⁾ といい、また「ナショナリズムは現代文明をどん底に突き落す主要勢力である」⁽¹⁹⁾ ともいうにいたるのである。また、ラッセルは、ナショナリズムが教育におよぼす影響にふれながら、「ナショナリズムは、人間性の精神の泉をほしあげてしまう危険な他の教義である」⁽²⁰⁾ とも告白している。

ラッセルは、「近代ナショナリズム」の構造契機として、このような害悪を生ずる狂信的とも思われる信念をもっているとき、そしてこの信念は「宗教的要素」(religious element) から成立しているのである⁽²¹⁾。彼は、この宗教的要素とは、人びとが何かのために喜んで自分を犠牲にしたり、個人の生活を進んで国民の生活のなかに融合させようとする態度のことであるとして、これを次のように分析した。すなわち、①「興奮への欲望」(the desire for excitement) ②「戦勝への欲望」(the desire for triumph) ③「名声への欲望」(the desire for honor) および④「権力への欲望」(the desire for power) である⁽²²⁾。

ナショナリズムを、このように宗教的要素において把えるとき、ナショナリズムは「愛国心」(Patriotism) に通ずる。かくてラッセルは、近代ナショナリズムを「宗教としての愛国心」(Patriotism as a religion) とよぶにいたるのである⁽²³⁾。そもそも、愛国心は、土地と身の周りの事物や人びとに対する偽りのない愛情からほとぼりしりであるものである。ラッセルは、その感情の根を、①「地理学的なもの」(geographical) と②「生物学的なもの」(biological) とに分けて把えている。愛国心はもともと素朴なる自然発生的な形として出発するものであって、本来的な姿にあっては望ましいものである⁽²⁴⁾。しかしながら、その愛国心は、われわれ自身と類似している人びとへの愛好心とか、集団のなかで協力したいという衝動とか、自分の属する集団の業績に対する誇りの意識とかが複合されて、これらが政治的・経済的な性格をとってナショナリズムへと傾斜してゆくのである。

近代ナショナリズムの構造契機を分析すれば次の表のごとくなる。



ラッセルが、ナショナリズムにおける愛国心を問題とするのは、それが学校教育におよぼす影響を考えたからである。それは「ナショナリズムとしての愛国心」(Patriotism as Nationalism) に、

政治的イデオロギーがからんで、それが学校教育に介入してくるからである。すなわち、教育のなかで、青少年たちは、もっとも重要な社会的忠誠はかれらが所属している国家に対するものであり、政府の命ずるように行動することがその義務を履行することであると教えらるるからである。そしてラッセルはそのような教育的操作として、次の2つの方法がとられるとされている。

(4)

ラッセルは、教育と政治の問題をまとめた『教育と社会秩序』(Education and the Social Order, 1932)のなかの「教育における愛国心」(Patriotism in Education)において、まず「国旗に対する崇敬」(reverence for the flag)⁽²⁵⁾をあげる。国旗は国にとって戦争能力の象徴であり、国旗に対する崇敬はそのまま国家に対する崇敬となる。ラッセルは、狭量な国家主義的な考え方を教育のなかに持ち込むことを排斥するのである。この点について、民主主義教育の旗手であるJ. L. チャイルズ(J. L. Childs)が、まずわが祖国をといった国家主義的な態度を「国旗的愛国心」(flag patriotism)⁽²⁶⁾といい、これに対して充分警戒しなければならないとされているのも同様であると思われる。

次にラッセルは、「偽りの歴史、偽りの政治学、偽りの経済学(false history, false politics, false economics)を教えること」をあげる。青少年たちは、外国の過ちは教えられるが、自国の過ちは教えられないで、自分たちの国家が関与してきた戦争は、ことごとく防衛のための戦争で、外国のたたかった戦争はすべて侵略のための戦争であると思うように仕込まれる。かくて一般市民は、「掠奪のために殺戮に知らず知らず参加する積極性を身につける」⁽²⁷⁾のである。

ラッセルはいう、「歴史は、すべての国で、同じように教えられねばならない。歴史は国家の歴史でなく、世界の歴史でなければならない。それも戦争などよりも文化的に重要な事項が強調されなければならない」⁽²⁸⁾と。ラッセルは、その平和への念願をこめてさらに次のように論じていく。戦争について教えられねばならないならば、勝利や英雄的行為という観点からでなく、子どもたちが負傷者の群れた戦場をつぶさに迷い歩くごとく、破壊された地帯の家もない人びとの窮状を実感するごとく、またその残忍さや不正の数々を知るように教えられなければならないのである。

さて、つぎに「近代ナショナリズム」が、「帝国主義」(Imperialism)へ発展する要素をもっていることを考察しよう。すでに述べたごとく、ラッセルはナショナリズムは、それが権力の保持者に握られた場合に帝国主義に転化するといっているのである。すなわち、「帝国主義とは、権力の保持者の手中にあるナショナリズムなのである」(Nationalism in the holders of power is called Imperialism)⁽²⁹⁾。そもそも帝国主義は、あらゆる形態において各種の搾取と押圧を行なうものであり、その搾取はまさに掠奪的とさえいえるのである。換言すれば、帝国主義とは、資本主義のより掠奪的な段階に突入した状態をさしているものである。まさにラッセルのいうごとく、「勝ち誇ったナショナリズムは帝国主義になる」(Nationalism triumphant becomes Imperialism)⁽³⁰⁾であり、そして領土拡張、植民地支配、軍事力の発揮などのイデオロギー的政策をとるにいたるのである。かくてナショナリズムは、対外的侵略のためのイデオロギー的武器と化し、あやまれる愛国心教育とあいまって戦争への行程を進むのである。

ラッセルは、そのために、この帝国主義的イデオロギーの偽装化した「近代ナショナリズム」を極度に非難し攻撃したのである。彼は帝国主義的イデオロギー化したナショナリズムを名づけて、「資本主義のより掠奪的形態によって起された迂回的な結合物である」⁽³¹⁾といい、そのために「国家の主要な活動は、大規模な殺人行為の準備である」⁽³²⁾ともいっている。けだし「近代的ナショナ

リズム」という遺産こそ、現代人にとって、まことに罪深い遺産なのであった。ナショナリズムはかくして帝国主義と交錯しながら発展してゆく。かつてE. H. カーが述べたごとく、古きナショナリズムはたしかに没落したけれども、その動向はナショナリズムの歴史的役割が終ったということではなくて、国際的社會が形成され拡大されてゆく進行過程のなかで、帝国主義と交錯しながら発展するのである。

現代の帝国主義の運命を論じて注目すべき発言をしているG. W. F. ハルガルテン (G. W. F. Hallgarten) は、現代の帝国主義の発展の段階が「超国家の競合時代」(the age of super-state rivalry)⁽³³⁾ であるといっている。そして彼は、現代の特徴は、強大な権力ブロックの主導国が事実上その国境を越えて勢力の伸長をはかり、新しい軍事的、政治的な属国を作り出そうとする超国家競合の状態であって、そこでは軍部の占めている圧倒的な地位の自己主張が生じ、それがあらゆる国際紛争を尖鋭化しているのであって、これをそのまま放置したならば、再びかつての帝国主義の時代に引き下がるであろうと警告を発している。

そして近代ナショナリズムは、帝国主義と交錯して発展する段階にいたるや、帝国主義の生んだ鬼子としての植民地民族主義の抬頭を来たし、現代ナショナリズムへの状況の変化を呈してゆくのである。

(5)

では、さいごにナショナリズムの第2の形態としての、「民族自決主義」(Self-Determination) について考察しよう。これは同じナショナリズムの流れをくみながらも、帝国主義に対抗するものである。民族自決主義としてのナショナリズムは、アジアの民族主義のなかに、もっとも端的にあらわれているといえる。転換期に直面する世界史の現段階において、アジアの諸民族の動向は、新しい世界秩序を決定する最大の要因である。ラッセルのいうごとく、「アジアおよびアフリカにおけるナショナリズムは、西欧の帝国主義に対する抵抗で活を入れられた」⁽³⁴⁾ のであった。

アジアのナショナリズムは、独立後まもない諸国の民族主義を支柱として、民族的意識を主体的条件とする民族主義の国際的結合の関係を強固にしていった。つまり連帯性意識をかためていったのである。とくにインドのナショナリズムは、まさに外国支配の残存に対する抵抗の支柱となり、アジアにおける新しい連帯的役割を果たしている。ネルー (J. Nehru) が、「外来の力が自由にアジアの運命を決定していた時代はすでに過ぎ去った。われわれはアジアの平和を愛する国と人民の一致団結が戦争排発者の計画を失敗に帰せしめるであろうことを深く信ずる」といったことばはそのことを如実に示すものである。

では近代ナショナリズムを、その害悪と不幸から救う方法は何であろうか。ラッセルによれば、それはナショナリズムを減少させること (the diminution of nationalism)⁽³⁵⁾ である。そのために、彼は、「国際主義 (Internationalism) を、その当然の領域、すなわち経済・政治・戦争の領域で発展させなければならない」⁽³⁶⁾ ことを提唱する。ここでわれわれは、

Nationalism→Internationalism

という問題に到達する。ラッセルは、すでにインダストリアルイズム (Industrialism) とナショナリズム (Nationalism) の相互関係を論じたあとで、つづいて「インターナショナリズムへの推移」(The Transition to Internationalism) を論じている。ラッセルによれば、インターナショナリズムは、その可能性や不可能性はある程度情緒的要素によるけれども、本来的には情緒的なものではなく、世界政府 (world-government) の要素をもったものである。しかもその世界政府の要素は

全人類にその決定したことを推進させ、諸国家の関係を、国家間の相対的な力によるのではなく、法律によって規制するにたる強さをもった組織の創造なのである⁽³⁷⁾。

ラッセルは、国際政府 (International government) を望む理由として、①戦争の防止、②異った国家や国民のあいだにおける国際的正義の獲得の2つをあげる。彼が終始考えていたことは、「世界が現在かかえている難問題を解決するためには、無制限のナショナリズムではなく、国際主義の発達にたよらなければならない」⁽³⁸⁾ということであった。もっと端的に言えば、「もし人類が存続すべきものだとしたら、ナショナリズムは新しい理想——インターナショナリズムと協調しなければならない」⁽³⁹⁾ということなのである。

かくて、ラッセルは、近き将来に、戦争の原因はとり去られ、その暁には、人間の思考の習慣はしだいに真の国際政府を作るような方法に変わってゆくことを望むのである。かつて、世界のすべての国は、自己の利益を世界全般の利益よりも重視した点で罪をおかしてきた。国際的な機関が有力になり、あれこれと特定の地域のおす横車ではなく、人類全般の福祉にしたがって難問題の解決を主張できるときがくるまで、こうした罪はおかされつづけるのである。ラッセルのこの希望の実現は困難なことであろう。しかしそのことによってのみ、世界の平和は維持されるのである。ラッセルの世界政府論は、かくのごとくインターナショナリズムへの過程によって確立されるのである。

ラッセルは、ナショナリズム、とくに近代ナショナリズムの構造契機たる「ナショナルなもの」を分析して、それが政治権力に媒介されたときに、あらゆる害悪を生じてきたことを論じ、それを文化的なものに浄化し、人間性の内部に還元してゆくときに、おのずからインターナショナリズムへと止揚されてゆかなければならないということを論じたのであった。そしてこの理論は、彼のナショナリズムの分析が、平和論を媒介とし、世界政府の確立という到達目標に指向されたときに、インターナショナリズムの可能性が認められるのである。

本稿においては、民族自決主義の究明はなお不充分であり、社会主義におけるナショナリズムの分析はその余裕をもたなかったのであるが、いずれこれらについては、目下まとめつつある彼の「ヒューマニズム論」において取り扱いたいと思っている。国家への義務と人類への義務との関係が課題となり、また新ナショナリズムが問題となっている日本のこの史的時点において、ラッセルのナショナリズムに対する考察は、改めてわれわれの思想的姿勢を反省するに足るものであらうと思う。

注(i) L. L. Snyder, *The Meaning of Nationalism*, 1954, p. 94

(2) 丸山真男 『現代政治の思想と行動』1957, 下巻 p. 295

(3) 近代日本史叢書『日本のナショナリズム』1953, pp. 29~30

(4) B. Russell, *Principles of Social Reconstruction*, p. 23

(5) " *The Prospects of Industrial Civilization*, p. 27

(6) " *ibid.*, p. 19

(7) H. Kohn, *The Idea of Nationalism—A Study in its Origins and Background*, 1944 のなかで彼はナショナリズムをイギリス、フランスなどの「西欧型ナショナリズム」(主として教養ある中産階級によって支持され、漸次社会民主主義へと発展した)と中、東欧、アジアなどの「非西欧型ナショナリズム」(貴族階級および下層大衆からの支持によって発展した)とに分けている。

(8) E. H. Carr, *Nationalism and After*, 1945 彼はナショナリズムを、第1期(中世的結合が分離して、民族と宗教の国教化に始まり、フランス大革命に終る)

金子 B.ラッセルのナショナリズム論

第2期(ナポレオン戦争に始まり第2次世界大戦の勃発まで)

第3期(1914年から第2次世界大戦の勃発まで)

第4期(はたしてありうるか)という歴史的段階に分けた。

- (9) F. Hertz, *Nationality in History and Politics: A Psychology and Sociology of National Sentiment and Nationalism*, 1944, Ch, I
- (10) B. Russell, *Fact and Fiction*, p.116
- (11) 岡本精一 『ナショナリズムの論理』 1966, p.38
ここで彼は近代ナショナリズムが人間の自由の確立を志向するリベラリズムと、国家の忠誠を要求するナショナリズムとが論理的に相互否定的でありながら、歴史的に統一して発展していったことを述べている。
- (12) B. Russell, *Fact and Fiction*, p.116
- (13) " , *ibid.*, p.121
- (14) " , *Principles of Social Reconstruction*, p.41
- (15) C. J. H. Hayes, *The Historical Evolution of Modern Nationalism*, 1931
ヘイズは「近代ナショナリズム」をわけて、①「ジャコバン・ナショナリズム」(Jacobin nationalism) ②「伝統的ナショナリズム」(traditional nationalism) ③「自由主義的ナショナリズム」(liberal nationalism) として、とくに②と③の両性格をあわせもつところにその特質があることを示した。ただし①がのちに帝国主義的ナショナリズムへと発展してゆくのである。
- (16) E. Lemberg, *Geschichte des Nationalismus in Europa*, 1950 S,27
レンベルクは、ナショナリズムを「素朴で衝動的なナショナリズム」と「イデオロギー的ナショナリズム」とに分けている。
- (17) B. Russell, *The Prospects of Industrial Civilization*, p.28
- (18) " , *Education and the Social Order*, p.138
- (19) " , *ibid.*, p.144
- (20) " , *On Education*, p.247
- (21) " , *Principles of Social Reconstruction*, p.41
- (22) " , *Justice in War Time*, pp.51~52
- (23) " , *Principles of Social Reconstruction*, p.41
- (24) " , *Education and the Social Order*, pp.135~136
- (25) " , *ibid.*, p.136
- (26) J. L. Childs, *Education and Morals*, 1950, p.276
- (27) B. Russell, *Education and the Social order*, p.138
- (28) " , *ibid.*, p.140
- (29) " , *The Prospects of Industrial Civilization*, p.27
- (30) " , *Fact and Fiction*, p.117
- (31) " , *Education and the Social Order*, p.205
- (32) " , *Power—A New Social Analysis*, p.220
- (33) G. W. Hallgarten, *Imperialism after World War II*.

「第2次世界大戦後の帝国主義」『思想』1966.1月号 pp.60~79

彼は帝国主義の政治的発展の段階を、①第1次世界大戦以前の古典的帝国主義の時期 ②ファシズムの時期 ③第2次世界大戦後の時期に分けて、③を「超国家の競合時代」の時期としている。

東京家政大学研究紀要 第7集

- 34) B. Russell, Fact and Fiction, p.117
- 35) " , The Prospects of Industrial Civilization, p.31
- 36) " , Fact and Fiction, p.123
- 37) " , The Prospects of Industrial Civilization, p.84
- 38) " , Fact and Fiction p.118
- 39) " , *ibid.*, p.114